

山陰道鎮撫使と松江藩展

——鎮撫使案内の虎の巻——

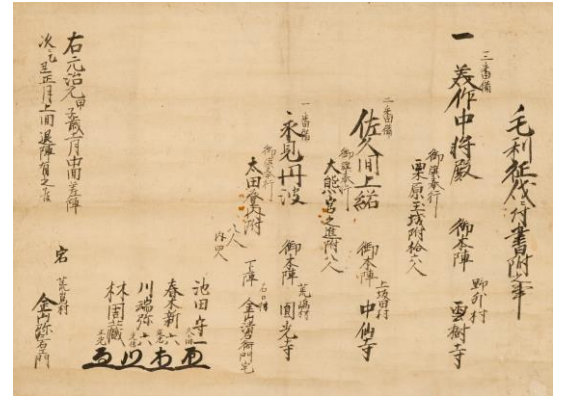
津山藩士が出雲国能義郡に逗留した時の書付

幕末、1863年（文久3）尊王攘夷運動の高まりを恐れた江戸幕府は、天皇や薩摩藩の支持をとりつけ、京都から急進派の公家や長州藩士を追放し、翌1864年（元治元）、長州を攻めて屈服させた（第一次長州征討）。

この時、美作国（岡山県）の津山藩も幕府から長州への出兵が命ぜられた。11月5日に一番備として士大将の永見丹波以下75名が、6日には二番備として士大将の佐久間上総以下70名、9日に藩主松平松平慶倫自ら出馬し、以下125名の藩士が従った。その他の兵士・人夫など総勢4,000人にも上り、農民出身者も多くいた。

一行は山陰道を通り、藩主は能義郡の雲樹寺（安来市）に逗留し、他隊も周辺に泊まった。11月末に藩主は広島へ向かうが、一番備・二番備はそのまま留まった。この時、一番備の池田・春木・川端・林の四人が能義郡荒島（安来市荒島）の金山家（金山清右衛門家）に居留し、11月下旬から翌年正月上旬までの約1か月半を過ごした。

この書付は、宿を強制された代償に書いていったもので、4人は「食事が悪い」とか「廊下が狭い」など小言をいって「横暴を極めた」という。



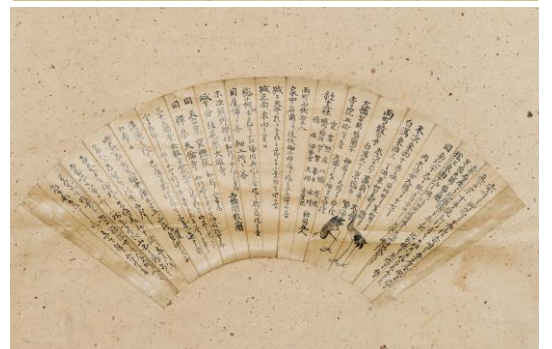
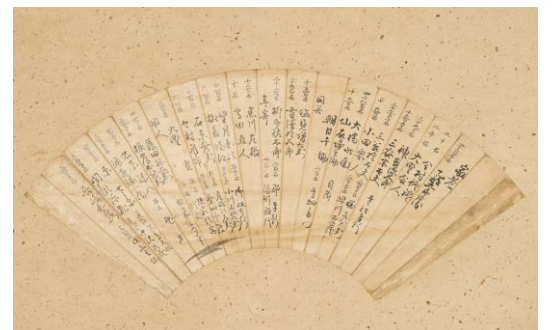
【釈文1】	
右元治甲子歳十一月中旬差陣	池田守一久尚(花押)
次ニ乙丑正月上旬退陣有之候	春木新六延忠(花押)
岩 荒島村	川端弥六光信(花押)
金山弥三右工門	林周蔵正光(花押)
	内四人
一番備	荒嶋村(安来市)
永見丹波	御本陣 円光寺
御旗奉行	右同村
太田登内附	下陣 金山清右衛門宅
八人	
二番備	上坂田村(安来市)
佐久間上総	御本陣 中仙寺
御旗奉行	
大熊宮之進附八人	
栗原玉城附拾六人	
御旗奉行	
野外村(安来市)	
御本陣	雲樹寺
三番備	
美作中将(松平慶倫)殿	
毛利征伐二付書附之事	

鎮撫使総督・西園寺公望を案内した時の虎の巻

1868年（慶応4=明治元）1月、鳥羽伏見の戦いで勝利を収めた官軍は、山陰道の諸藩に恭順の意を示させるべく、薩長軍を従え弱冠20歳の西園寺公望を鎮撫使総督として鳥取、松江へ向かわせた。松江に来た西園寺の案内役を命じられたのが、松江の商人・小西治左衛門であった。小西家は和泉塚の薬屋であったが、松平家初代藩主直政が信濃松本から出雲松江へ入る際に松江へ来た。

西園寺一行は2月28日から5日間松江に滞在した。この扇子（表裏面=右写真）は、小西が西園寺を案内する時の虎の巻として作成したもので、案内に際し、恐る恐るこの扇子を開いたり閉じたりしながら、松江の地勢などを言上し、大任を果たしたと伝わる。

西園寺の質問に即座に答えられるよう、家老たちの石高や松江城下の地理を、西園寺の宿所を起点に距離や、寺社など地理情報を細かに記し



【釈文2】(扇表面)

家老	乙部九郎兵衛		
四千二百五十石	今村修礼		
二千石	大野舎人		
二千石	神谷源五郎		
三千九十九石	三谷半太夫	寺社奉行	
千六百五十石	三谷権太夫	三千七十石	堀彦右衛門
三千七百七十石	小田要人	三百五十石	早川太兵衛
千六百石	大橋此面		
四千八百石	仙石城之助	目附	
千六百石	朝日千助	三百石	高畑多門
同並			
千五百石	塩見増右衛門		
二千五百石	有澤権五郎		
二千三百石	柳多佐太郎	二百石	郡奉行
年寄		二百石	隠州郡代
千二百石	黒川左膳		
千石	高田直人		
七百石	望月円次	百五十石	御船奉行
六百石	柳多波江	百五十石	小川太祖右衛門
七百石	石原九左衛門	百三十石	尾崎次左衛門
六百石	今村唯一	百三十石	栗田千熊
六百石	大野寅	百石	隠州代官
用人		百石	代官
四百石	藤田林右衛門		
三百五十石	根岸太次右衛門		
三百五十石	石原弥八	百石	地方
三百五十石	酒井弥三兵衛		
三百五十石	原七兵衛	廿五人扶持	足高文碩
三百七十七石	間瀬源蔵	廿五人扶持	中沢秀民
三百七十七石	長崎和左衛門	十九人扶持	杉山玄仙

しており、維新期の城下の状況をうかがう貴重な史料である。

明治時代中期、小西家は窮乏し、荒島にあった土地の米作りに関わっていた金山家へ窮乏を訴えた。金山家は50円を送り、その返礼にこの扇子が金山家へと渡った。

【釈文3】(扇裏面)

赤崎ヨリ御宿マテ十五丁程、赤崎ヨリ桑名屋脇マテ六丁真言宗千手院知行有之候得共、何程か覚不申上。桑名屋ヨリ北堀マテ三丁余、北堀橋ヨリ京橋マテ五丁京橋九間二幅三間。松江東西十八丁、但シ津田街道町端ヨリ末次中原地蔵堂マテ同南北二十九丁、但シ末次赤崎ヨリ白濁オノ神マテ。内末次分大橋マテ十七丁。末次東西十五丁、但シ漁師町ヨリ荒和井マテ白濁東西三丁、但シ東和田見町ヨリ灘町マテ両町々数二十五丁、末次十六丁、蔵前広ミ大手。白濁 九丁、京橋広ミ勢溜り。大橋七十間二幅二間半、御宿ヨリ大橋マテ二丁程。寺院五拾七ヶ寺、大橋ヨリオノ神マテ十二丁程。社十二社、愛宕 照床 八幡(八幡) 権現 社司五人。城内稲荷 宇賀 春日 氷川 橋姫 伊勢宮 天神 売豆記。両町山伏拾五人。家中名前并ニ役儀柄等存居候儀者荒増可答。城力天守敷ト御尋之節者、不案内之由答。城正面東向ト覚候。稲荷門御尋之節、城内惣門ト答、橋は稲荷橋ト答。用屋鋪ト答、細工所ト答。末次熊野神社知行如何不奉存、土橋間敷二間。城下分法花宗大雄寺。同 天台宗宝照院知行不奉存。同 禅宗天倫寺知行有之候へとも、何程敷不奉存。三十三間堂矢数歩合掛札等之訳御尋候ハ、町家之者ニ候へ者不奉存趣ニ申、尚また御尋候ハ、追而可申上旨答候事。造酒之儀者、已年已前造成之三步一造申付。相用候。町家一名願出、國中銀遠在へ正錢運送自由之ため。当分為望之願出ニ御座候。当家より之錢札者、先年廃却申渡し有之引上クニ相成候へとも、留たふしハ残も有之哉、山国之儀、品々差支之儀有之、惣方難渋無之ため町人とも願出取遣いたし候儀ハ有之趣ニ相聞候旨。

【釈文3の意訳】

○赤崎(菅田辺り)から宿(西園寺公望宿所)までは15丁程(約1.6キロメートル)、赤崎から桑名屋脇まで6丁(約600メートル)です。真言宗千手院の支配高はあるが、覚えていません。桑名屋から北堀まで3丁余(約300メートル)、北堀橋から京橋まで5丁(約500メートル)、京橋は9間(約16メートル)で幅は3間(5.4メートル)である。○松江の東西は18丁(1.8キロメートル)。ただし津田街道の端(津田辺り)から末次中原地蔵堂(外中原辺り)までである。○松江の南北は29丁(3キロメートル)。ただし末次赤崎(菅田辺り)より白濁才の神(新町辺り)までである。うち末次分は大橋(松江大橋)までの17丁(1.7キロメートル)である。○末次の東西は15丁(1.5キロメートル)。ただし漁師町(東本町)から荒和井(荒隈)までである。白濁の東西は3丁(300メートル)。ただし東和田見町から灘町までである。両方の町の数は25町ある。末次は16町あり、蔵前の広いところが大手である。白濁は9町あり、京橋の広いところが勢溜りである。○大橋(松江大橋)は70間(126メートル)で幅は2間半(4.5メートル)、宿から大橋までは約2丁(200メートル)である。○寺院は57寺ある。大橋(松江大橋)から才の神(新町)まで約12丁(1.2キロメートル)である。神社は12社あり、社司は5人いる。愛宕・照床(阿羅和比)・八幡(若宮八幡、現阿羅和比)・権現・橋姫(売布)・伊勢宮・天神(白濁天神)・売豆記(売豆紀)の各神社。○山伏は15人いた。○松平家家来の名前や役職など知っていることはだいたい答える。○城や天守について(西園寺公望が)お尋ねになったらよく知らないと答える。城の正面は東向きである。稲荷門はとお尋ねになったら、城内の惣門だと答える。橋は稲荷橋と答え、用屋敷、細工所と答える。○末次の熊野神社の支配高はどれほどか知りません。土の橋は2間ある。○城下には法華宗の大雄寺、天台宗宝照院があり、支配高は知りません。また禅宗の天倫寺の支配高もあるが、どれだけが知りません。○三十三間堂(城西公民館前・弓道場)の詳細を訪ねられても、町人なので知らないと答える。さらに尋ねられれば、追って申し上げますと答える。○酒造については、巳の年(11年前の1857年)以前の3パーセント分を造っている。○町人が願ひ出る出雲国中の銀の遠方への運送は当分間の願ひ出とする。○当家(小西家)からの錢札は先に廃却したが、残っているものもあろうか。山の多い国なので、品々が滞ることもあり、不便しないために町人共の願ひ出を審議して下さると聞いています。

参考文献 『岡山県史』9、『津山市史』5、金山十代男『かみあらしま』(一九八三年)、同『上荒島第二集竹馬』(一九八五年)、『山陰新聞』一九三二年二月四日付「園公百日祭を前にゆかりの城内扇」。 ※二点の史料は共に金山十代男氏所蔵